百々裏話（97）

おもて　あきら

——鉄之丞家代々（その六）——

◉観世四郎清宣（三代目。続き）

前回に清宣を根拠なくキヨノブと読んでおいたが、鉄之丞家ではキヨノリと伝えておられる由である。家伝に従うべきものと思われるので、訂正しておきたい。

文化12年に名（通称）を鉄之丞から織部へ改めた清宣の最初の大仕事は、父清興の在世中に認可され、兄観世大夫清暘によって興行された文化13年9月から翌年9月へかけての十五日間の勧進能への出演であった。この勧進能の番組には、予定の変更のためか種々異なる形が伝えられているようであるが、観世宗家蔵の、朱筆訂正の多い折本の番組が実際の形を伝えていると認められる。同書に基づいて、清宣出演の曲目を初日から順に抜き出すと、次の通りである。

13年9月22日　田村
10月2日　加茂
14年4月19日　東北（予定は桜川）
4月22日　善界
4月23日　蟬丸ツレ・土蜘
4月26日　小督・葵上
4月29日　紅葉狩
8月3日　小鍛冶白頭（予定は望月）
8月4日　舎利
8月11日　草紙洗
8月13日　大仏供養
8月18日　翁（予定ナシ）・和布刈（予定は別人の合冑）・天鼓
8月22日　翁（予定ナシ）・通小町
9月7日　富士太鼓・融
9月18日　安達原

この時の勧進能については前回にふれた柳沢澄氏の記事に詳しいが、幸橋門外に建築中の興行場が大風のため倒壊して開始が二十日近く遅れたのがケチのつき初めで、二日目の終了後に火災をおこして舞台・見所・諸道具を全焼する不幸に遭遇した。翌年になって舞台等を建て直し、どうやら再開したものの、七日目を過ぎた5月8日に将軍の生母が歿したため、歌舞音曲停止などがあって三ケ月の中断を余儀なくされ、満一年もかかってやっと終了するという惨憺たる結果であった。ことに火災による損害が大きく、観世大夫は14年4月に幕府から千五百両を借用している（『旧幕引継文書』）。もちろん勧進能再開のための費用であろう。（この借金の事実について、西山松之助氏著『家元の研究』は、観世大夫

山辺知行著

続 能装束文様集

世界に冠たる日本染織の中にあって特に豪華を誇る桃山・江戸期の能装束の名品百点を厳選し、部分原色版印刷にモノクロで全図を併せ、その姿を浮彫にして、見る人の目を楽しませてくれる。

各千部限定

カラー図版（部分）五〇点
モノクロ図版（全図）五〇点
和英両文解説
A3変型判　つむぎ張表紙　上製函入

正編　一八、〇〇〇円
続編　三〇、〇〇〇円
定価　正続編　五〇、〇〇〇円（帙入）
（送料実費）



千代田区神田小川町二ノ一
檜書店
電話（二九一）二四八八～九

の日頃の経済的困窮を示す資料と見なし、勧進能も大夫の困窮を救済するために許可されたものと解しておられるが、勧進能の途中での失火の事実に気づかれなかったための誤解であろう)。分家の清宣が本家の苦境にどの程度の助力をしたかは明らかでないが、幕末の頃、金春大夫家の借金の返済に分家の金春八左衛門が大夫と一体で苦労している例(般若窟文庫文書)が参照される。清宣も同様であったろうか。

なお、右の勧進能の八日目に、予定の番組では織部清宣の望月が演じられるはずであった。この望月は、宝生流や喜多流では早くから演じていたが、観世流では、明和改正謡本にもなく、天明三年(一八七三)書上や寛政七年(一七九五)書上の演能曲目にも記載されていない(観世流の旧外組謡本の六十二番中、寛政書上に見えないのは望月・七騎落・弱法師・紘上の四番のみ)。従って寛政七年以後に観世流が復活したものと解されるが、管見では、文化5年10月5日の本丸奥能で鉄之丞時代の清宣が演じているのが、観世流望月の最初の上演記録である(ふれながし御能組)。恐らくはその直前の頃に、一子相伝の石橋にかわる分家の習い物として、父の清興が子の清宣のために復興したのであろう。十五日間の勧進能の中日の眼目の能として織部清宣の望月が予定されたあたり、それが分家の能として早くも定着していたことが想像される。観世流の望月が大夫家の能ではなく、鉄之丞家の能であるとの伝承は、今もなお生きているはずである。

文政3年(一八二〇)2月29日の公家衆接待能に、急病の兄観世大夫に代って、織部清宣が翁と脇能志賀を勤めた(別に本役の祝言能呉服も)。これが表能で清宣が翁・脇能を演じた唯一の記録である。前回にも述べたが、表能では家柄が重視され、四座一流の大夫に次ぐ織部家へは、祝言能か、せいぜい二番目が割り当てられる程度で、翁や脇能は大夫の代理以外にはチャンスがなかったのである。奥能の場合は、翁つきが比較的少なかったので、脇能は時々演じているものの、清宣は一度も翁を舞っていないようである。

さて、鉄之丞を織部に改めて六年しかたたぬ文政四年、清宣は織部から四郎への改名を願い出、11月18日付で許された。初代以来の通称である織部の名を一旦は襲いながら、37歳で四郎と改めた事情は明らかでないが、四郎の名が世阿弥の弟四郎に由来することは確かであろう。観世大夫家が世阿弥の直系ではなく、観阿弥の次男四郎の血統である事は、『観世累葉履歴』にも明示されており、歴代の大夫も織部家の代々も知っていたはずであ

錬仙会 **秋の例会** 〈予定番組〉

6時開演 **水道橋能楽堂**

9月14日(金)

能 **小裡會我**(こそでそが) 北浪 照雄
浅井 文義

狂言 **素袍落**(すおうおとし) 三宅 右近

能 **殺生石**(せっしょうせき) 白頭 山本 順之

10月12日(金)

舞囃子 **唐船**(とうせん) 山口 幸徳

狂言 **名取川**(なとりがわ) 野村万之丞

能 **仏原**(ほとけのはら) 観世 静夫

11月9日(金)

狂言 **井杭**(いぐい) 野村 万作

能 **朝長**(ともなが) 観世 寿夫

12月14日(金)

能 **半蔀**(はじとみ) 観世錬之丞

狂言 **三人片輪**(さんにんがたわ) 大蔵弥太郎

能 **乱**(みだれ) 若松 宏充
浅見 真広

る。また、世阿弥の弟四郎以来、観世座の脇之為手(大夫補佐役。ワキ方でもあった)が代々四郎を称し、室町幕府の年頭参賀に際しても観世大夫と観世四郎のみが能役者として将軍に拝謁する光栄をになっていた事実を、誰かに聞き知って、それに刺戟されたことも想像できよう。四代目が織部を名乗らなかった点を考え合わせると、織部の名を何かの事情で避けた場合もあり得るようであるが、その辺は所詮推測の域を出ない。とにかく、鉄之丞家の歴代で四郎を名乗ったのは清宣だけであった。

四郎と名乗った後の清宣の活動については特記すべき事はない。『ふれながし御能組』で見ても、江島(文政7・10・5、奥能)・谷行(8・12・11、西丸能)・輪蔵(10・11・9、西丸能)など珍しい能をも演じているのと、病弱だったらしい兄観世大夫の代理をしばしば勤めていることが目立つ程度である。

文政13年3月12日、兄の観世大夫清暢が50歳で歿したが、その後を追うかの如くに、翌月(閏3月)9日に清宣も他界した。前回に推測したように天明5年生れならば、享年46歳である。兄清暢は死の二日前に遺言状を認めており(観世宗家に現存)、覚悟の死であったらしいが、清宣も急死ではなかったようで、同じく死の二日前に、実子鉄之丞への相続願を若年寄に提出している。『弘化四年由緒書』に、「同(文政)十三寅年閏三月七日、久々病気ニ罷在、迚茂本服難仕躰ニ御座候間、実子鉄之丞江是迄之通新規御扶持方並拝領屋敷被下置、引続御用相勤候様林肥後守殿江奉願置、養生不相叶同年九日病死仕候ニ付、御扶持方拝領屋鋪差上申候」とある。但し、『観世累葉履歴』は清宣の忌日を3月23日としており、それが事実で、相続願を提出するなどの形を整えた上で、公儀へ届け出た忌日が閏3月9日なのかも知れない。跡目相続の関係からそうした工作をするのは江戸期には常の事で、幕府でも知って知らぬふりをしていた。清宣の場合は、実際には急死だったかも知れず、大夫の死と近すぎるための工作だったのかも知れない。

歿する前年の10月5日、本丸奥御能で、観世大夫は蟻通を、四郎清宣は盛久を勤めたのが、兄弟の最後の舞台であったらしい。そういえば、清宣が勤めた能には、直面物が比較的多いようである。直面の田村によって将軍に認められたという話(前回参照)といい、かなりの美男子ではなかったろうか。

(48・7・4)



